

twitter

gruunorg 1/30 13:35
千葉と埼玉の乳児院で、春くらいまでに新たに抱っこがはじまりそうです。

gruunorg 2/2 19:17
ぐるーんサポーターの渡部ゆきこさん、神奈川の乳児院にお引き合わせしました。お孫さんのお世話に慣れているらしい、気遣いも細やか。とてもいいサポートをしてくださりそうです

gruunorg 2/2 19:20
私は引き合わせのあと、そのまま抱っこに。私の胸の中で、指をしゃぶりながら、全身リラックスの2歳のかずとくん。保育士さんに「かずと赤ちゃんになってる？。抱っこ、気持ちいいもんね？」と言われました(´-`)/

gruunorg 2/3 05:43
新しいイラストレーターであり、ぐるーんサポーターでもある佐藤牧子さんをご紹介します。↓... fb.me/XWU h9CmW

gruunorg 2/4 15:15
ぐるーんサポーターの飛田さんにお会いしました。「事務面でお手伝いできることがあれば教えてください。」と連絡をくださった方。乳児院で保育士さんとしても活躍させていただき、理想と現実のギャップに対する飽望と、ギャップを埋めたいという真摯な気持ちをお持ちです。

抱っこボランティア1年半
「新しい絆 広がる」

乳児院を定期的に訪れ、親と一緒に暮らせない子どもを数時間抱きしめる。緊張してこわ張る子ども、5分後には目を合わせてにっこり笑う。任意団体「ぐるーん」を設立し、「抱っこボランティア」を始めて1年半。フェイスブックを通じてメンバーは約80人にまで増えた。「まずは触れ合って、誰もが持つスキンシップの欲求を満たしたい。神奈川、岡山、大分などの4施設に通う。

3年間の不妊治療を経て、双子の男児(7)を授かった。しかし1年後に離婚。「自分が病気をしたら、この子はどうなるの」。児童福祉の制度を身近に感じた。見学した保育園で、虐待の現場を目にして行政に連絡した。活動の原点だ。

転職先の保険会社の社会貢献プロジェクトで児童養護施設に通った。「息子を連れて行って自分に甘えたら、施設の子どもの複雑な気持ちになる」と考えていたら、子どもや職員が「寂しがってるんじゃない」と心配してくれた。一緒に訪ねると、子ども同士はすぐに仲良くなった。「施設の子も、外に出たらいろんな親子に会う。過剰に意識しているのは大人の方だと感じた」。ぐるーんでは、メンバーの子や里子、施設の子どもが共に遊ぶイベントを開催する。「幼い頃に遊んだ体験があると、特別視せず共感できる」と思うからだ。

「大人ができる範囲で子どもと触れ合い、差し伸べる手を増やしたい。里親や養子縁組という血縁を超えた絆につながると思っています」 【神真理子】

有尾 美香子さん

兵庫県尼崎市内で開かれた講演会で話す有尾美香子さん—昨年12月撮影、「ぐるーん」提供



ありお・みかこ

神奈川県出身、41歳。上智大文学部卒。ぐるーん(<http://www.facebook.com/gruun.org>)ではメンバーを募集中。

活動がうまくいかない時、どうする？

道は用意されているわけではないので、うまくいかないのが当たり前だと思っている。「失敗してもへっちゃら」というわけではないけれど、「ここがダメだったんだ」と反省し、平常心で次に進むようにしている。自分は喜怒哀楽が激しい人間だと自覚しているので、一言一憂しないように心がけている。

自分の子育てで大切にしていることは？

「お母さんは必ず正しい」と自分の考えを押しつけないようにしている。例えば、ぐるーんのイベントに参加した息子が、「(児童養護施設で暮らす)お友達はお父さん、お母さんと暮らせないんだね。お友達の家で暮らせばいいのにね」と言った。素朴だけど的を射ていると思った。親元で育てられない子どもを社会全体で育てる「社会的養護」を説明したり、諭したりせずに、「そうだね」と答えた。それがいいのかわからないけれど、迷っていることや分からないことは伝え、子どもと正直に向き合いたい。

プライベートでは何が楽しみ？

ぐるーんを始めてから、プライベートと仕事を分けず、融合させる気持ちでいる。昔から伝記を読むのが好きで、「情熱を持って生きている人たちはプライベートも仕事も一緒なのではないか」と思っていた。今は、子育ても含めて、すべてが私の生活になっている気がする。

母にとっても感謝している。

離婚後、母(70)と同居し、家事も育児も助けてもらっている。本当に恵まれている環境だと思う。ぐるーん設立準備のために会社を辞めたときは、母にしばらく黙っていた。心配を掛けたくなかったし、母娘だからこそ理解し合うのが難しい生き方の違いもあると思ったからだ。振り返ると、大学を出て就職、結婚、出産と、レールに乗って生きてきた。母は、離婚はしても、安定した会社員のまま子育てをするを期待していたと思う。会社を辞めたとき驚いたけれど、どこかで信じていてくれた気がする。会社員の頃は「一生懸命生きていない」という気持ちがあった。レールから外れたくて踏み出したわけではないが、仕事においては一般的なレールを歩くことが幸せとは限らないと思った。私はたまたま、やりたいものに会社ではめぐりあえなかったのだと思う。今は母の助けで仕事に打ち込めて、とても感謝している。 【神真理子】